

## 論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Association between Early Life Child Development and Family Dog Ownership: A Prospective Birth Cohort Study of the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

家庭での犬の飼育と3歳時点の子どもの発達との関連

ユニットセンター(UC)等名: 北海道ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: International Journal of Environmental Research and Public Health

年: 2021 DOI: 10.3390/ijerph18137082

筆頭著者名: 湊屋 街子

所属 UC 名: 北海道ユニットセンター

目的:

ペットの飼育は子どもの感情・社会発達において重要な役割を担うことが示されているが、これまでの研究では、子どもの発達と犬の飼育状況の関連を時期別に考慮したものはない。本研究の目的は、家庭での犬の飼育の有無と3歳時点の子どもの発達の関連を検討すること、犬の飼育状況の時期別の影響を検討することである。

方法:

3歳時点での発達評価(ASQ-3)と家庭での犬の飼育の情報のある78,941名の子どもの対象とし、家庭での犬の飼育の有無と子どもの発達の関係を検討し、さらに家庭での犬の飼育がある場合を「過去のみ」「現在のみ」「常に」の3群に分けて、家庭での犬の飼育がない群と比較を行った。母親の出産歴、年齢、妊娠中の喫煙歴、両親の教育歴、子どもが3歳時点での母親の精神面の健康状態、世帯年収を調整して解析を行った。

結果:

3歳までに家庭での犬の飼育がない割合は83.6%、「過去のみ」は8.5%、「現在のみ」は0.9%、「常に」は7.0%であった。犬の飼育のある家庭の子どもでは、飼育がない家庭の子どもと比べてコミュニケーション、粗大運動、問題解決、個人・社会において発達の遅れのリスクの低下と関連していた。さらに、犬の飼育が「過去のみ」では、粗大運動、問題解決において、「常に」では粗大運動、個人・社会において発達の遅れのリスクの低下と関連していた。

考察(研究の限界を含める):

本研究は、エコチル調査において生後6か月時点での家庭での犬の飼育が生後12か月時点の子どもの発達の遅れのリスクが低下することを示した報告の続編として実施した。本研究では、家庭での犬の飼育が粗大運動、問題解決、個人・社会の分野において、3歳時点の子どもの発達の遅れのリスクの低下と関連していた。一方で、犬と子どもの直接的な交流の評価や家庭での犬の飼育期間を考慮していない点等が研究の限界点である。今後、飼育期間別の長期的な観察とともに、犬と子どもの直接的な交流などを含めた評価をし、犬の飼育と子どもの発達の関連を解析することが望まれる。

結論:

3歳時点の子どもの発達において、家庭での犬の飼育は重要な要因のひとつである可能性が示唆された。